

日英多義語の認知意味論的分析: 「ムシ」と"bug"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 皆島, 博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/3051

日英多義語の認知意味論的分析：「ムシ」と“bug”

皆 島 博^(*)

(2010年9月27日受付)

0. はじめに

本論では、日本語の名詞「ムシ（虫）」と英語の名詞“bug”を取り上げ、その多義構造および意味拡張のプロセスについて、認知意味論的観点から分析を行う。日本語の「ムシ」と英語の“bug”は、両語とも日常的に多用される名詞であり、それぞれ、次のような、少なくとも3つの異なった意味において用いられる点で多義的といえる。

- (1) a. 夏といえばムシ（=昆虫）除けですね。
b. 練習のムシ（=何かに熱中する人）高3で開花（『読売新聞』見出し）
c. 旅のムシ（=何かの衝動を引き起こすもの）がうずうずと動き出すような本である。
- (2) a. Let's use bug（=昆虫）spray.
（虫よけスプレーをつけておきましょう）
b. Shutter-bugs（=何かに熱中する人）are people taking pictures and pictures capture moments in life.
（カメラ狂は写真を撮る人たちで、写真は人生のいろいろな瞬間をキャプチャする）
c. I've been bitten by the gardening bug（=何かに熱中させるもの）.
（ガーデニングの虫にかまれました；ガーデニングに夢中です）

本論では、上のような「ムシ」と“bug”が提示するさまざまな意味が無秩序に派生してきたのではなく、コアとなるプロトタイプの意味（基本義）を起点として、何らかの認知的動機付けによって、相互に関連のある転義を派生し、それぞれが有機的なネットワーク（放射状カテゴリー）を構成する、ということを示そうというものである。

*福井大学教育地域科学部人間文化講座

本論の目的は、「ムシ」と“bug”に関して、次の4点について、認知意味論的な立場¹⁾から記述を行ない、それらを明らかにすることである。

- (3) a. 「ムシ」と“bug”の複数の意味 (= 多義) の認定
- b. 「ムシ」と“bug”のプロトタイプの意味 (= 基本義) の認定
- c. 「ムシ」と“bug”の意味拡張を引き起こす動機づけの認定
- d. 「ムシ」と“bug”の基本義と転義にみられる類似点と相違点

1. カテゴリー拡張とその動機づけ

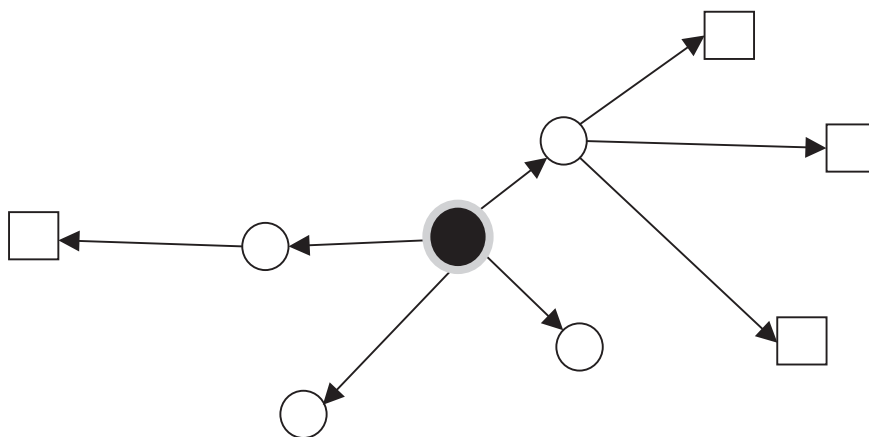
一般に、1つの語が2つ以上の意味を持つ場合、その語は多義的であるといい、そのような語を多義語と呼ぶ。認知意味論では、語の多義性について、カテゴリー拡張 (category extension) の結果生じたものであり、そのカテゴリーは中心的な事例から、その他のいくつかの非中心的な事例へと四方八方に拡張していくと捉えている (Lakoff, 1987; Sweetser, 1990; Taylor, 1995)。したがって、認知意味論におけるカテゴリーは、アリストテレス以来、西欧哲学で用いられてきた古典的カテゴリー観に基づくものではない。

古典的カテゴリー観では、カテゴリーの構成員の要件は [+] (プラス) か [-] (マイナス) かで区別できる必要十分条件によって定義される集合であり、全ての構成員がその必要十分条件を満たしており、構成員間にそのカテゴリーの構成員としての良し悪しや中心と周辺との区別はないものと考えられてきた。しかし、このようなカテゴリー観は自然言語の語の意味の集合には当てはまらないことが、近年様々な研究者 (Wittgenstein, 1978; Labov, 1973; Rosch, 1975; Lakoff, 1987) によって指摘されてきた。

認知意味論におけるカテゴリー観では、カテゴリーの構成員の要件は [+] か [-] かで区別されるものではなく、構成員間には構成員としての良し悪し、あるいは中心と周辺との別があり、カテゴリーには明確な境界線は存在しないと考える。このようなカテゴリーとして、最も一般的に見られるのが、中心となるプロトタイプが存在し、そこから何らかの動機付けによって複数の方向へとカテゴリー拡張が展開しているようなカテゴリー、すなわち、放射状カテゴリー (radial category) と呼ばれるものである。語の意味を1つのカテゴリーとして捉えた場合、古典的カテゴリー観よりも、このような非古典的なカテゴリー観の方がよく当てはまると思われる。

放射状カテゴリーは、Lakoff (1987) で提示されたカテゴリー・モデルで、ある中心的 (プロトタイプの) 構成員を取り囲むように2次的に周辺の (非プロトタイプの) 構成員が位置づけられ、その2次的な構成員を中心にしてさらに3次的に周辺の構成員が位置づけられるというように、結果として、幾重もの円が放射状に拡張していくカテゴリーをいう (辻 2002:238)。放射状カテゴリーのイメージを示すと次のようになる：

図1：放射状カテゴリーのイメージ（辻 2002:238）



上のイメージで、中心に位置する●は1次的構成員（プロトタイプ）を、○は2次的構成員を、□は3次的構成員を表している。すなわち、プロトタイプ●から○へ、さらに○から□へとカテゴリー拡張が展開している。

なお、認知意味論において、このカテゴリー拡張を引き起こす要因（動機付け）として主要な役割を演じるのが「隠喩（メタファー）」「換喩（メトニミー）」「提喩（シネクドキー）」と呼ばれる3種類の比喩である。これらについて、佐藤（1992）、瀬戸（1997, 2007）、舩山・深田（2003）などにしたが、次のように定義しておく。

- (4) a. **メタファー**：二つの事物の間に存在する何らかの類似性に基づいて、一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。
- b. **メトニミー**：二つの事物の間に存在する何らかの近接性（隣接性）に基づいて、一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。
- c. **シネクドキー**：一般的な意味を持つ形式を用いて特殊な意味を表す、逆に、特殊な意味を持つ形式を用いて一般的な意味を表す²⁾。

2. 日本語の「ムシ」の意味拡張

ここでは「ムシ」の意味拡張についてみていくが、はじめに「ムシ」の複数の意味を認定する作業から始める。その手がかりとして、次のような代表的な国語辞典に挙げられている意味の記述を比較してみよう。

『広辞苑』(第5版)	『大辞林』(第2版)	『大辞泉』(第2版)
<p>①本草学で、人類・獣類・鳥類・魚介以外の小動物の総称。昆虫など。</p> <p>②その鳴き声を愛して聞く昆虫。鈴虫・松虫など。</p> <p>③蠕形動物の称。特に回虫。</p> <p>④回虫などによって起ると考えられていた腹痛など。虫気。痢の俗称。狂、煎じ物。</p> <p>⑤潜在する意識。ある考えや感情を起すものになるもの。古くは心の中に考えや感情をひき起す虫がいると考えていた。</p> <p>⑥癩癧。</p> <p>⑦愛人。情夫。隠し男。</p> <p>⑧産気づいて起る陣痛。</p> <p>⑨㊦ある事に熱中する人。 ㊦ちょっとした事にもすぐにならぬ人、あるいは、そうした性質の人をあざけってという語。</p>	<p>①人・獣・鳥・魚・貝以外の小動物。多く、昆虫をいう。</p> <p>②美しい声で鳴く昆虫。マツムシ・スズムシなど。</p> <p>③人に害を与える小動物。人の体内にすむ寄生虫やノミ・シラミ・シミなど。</p> <p>④子供の体質が弱いために起こる病気。虫気。</p> <p>⑤人間の体内にあり、さまざまな考えや感情を起すものになると思われているもの。</p> <p>⑥何かをしようとする考え。〔多く、よくない考えについていう〕</p> <p>⑦癩癧。</p> <p>⑧一つの事に熱中する人。</p> <p>⑨ある特定の性向をもっている人。他の語と複合して用い、その人をあざけってという。</p>	<p>①人類・獣類・鳥類・魚貝類以外の小動物の総称。特に、昆虫をいう。</p> <p>②美しい声で鳴く昆虫。スズムシ・マツムシなど。</p> <p>③衣類や紙などを食い荒らす害虫。</p> <p>④人間のからだに寄生する害虫。蠕形動物の回虫をいうことが多い。</p> <p>⑤子供の体質が弱いために起こる種々の病気。</p> <p>⑥人間の体内にいて、意識や心理状態を左右すると考えられていたもの。潜在する意識や、感情の動きをいう。</p> <p>⑦一つの事に熱中する人。</p> <p>⑧(③にたとえて)愛人。情夫。隠し男。</p> <p>⑨他の語と複合して、そのようなことをする人や、そのような性質の人をあざけってという語。</p>

以上3つの国語辞典に挙げられている語義の記述を参考にして、「ムシ」について、次のような8つの異なる意味を認定することにする。

- ① (一般・総称的に) 昆虫
- ② (スズムシ、コオロギなどの) 鳴く虫
- ③ (ノミ、シラミなどの) 害虫
- ④ (回虫、ギョウチュウなどの) 寄生虫

- ⑤ (女性にとって好ましくない男性の) 交際相手
- ⑥ (虫が引き起こすと考えられていた, 癩癧, 不眠, 腹痛, 陣痛などの) 不快感の原因
- ⑦ (虫が引き起こすと考えられていた, ある考え, 感情, 潜在意識など生じさせる) 衝動の原因
- ⑧ (あることに) 熱中する人³⁾

2.0 基本義：〈昆虫〉

多義語の基本義 (=プロトタイプ的意味) とは, 意味拡張の起点となる, 意味ネットワークの中心に位置する語義である。基本義の特徴として, (i) 最も確立された, 字義通りの意味, (ii) 関連する他の語義 (転義) を理解する上での前提となる, (iii) 具体性 (身体性) が高い, (iv) 認知されやすく, 想起されやすい, などが挙げられる (舩山 2002:107, 舩山・深田 2003:142, 瀬戸 2007:4)。次のような例における「ムシ」は上記の条件を満たしているといえる。

- (5) a. 私が子どもの頃は, 近所の野山で, よくムシを採って遊んでいました。
- b. 腐った食品などを放置していたり, お米や粉類などにムシがわくことがあると思います。

したがって, 「ムシ」の基本義としては, (さまざまな) 〈昆虫〉を仮定しておくのが妥当であろう。

2.1 基本義からの転義：〈昆虫〉から〈鳴く虫〉へ

「ムシ」という語は, 次の例のように, 特に, 秋の夜に音色を立てる, 鈴虫やコオロギなどの鳴く虫を指すのに用いられる。

- (6) a. 秋の夜長を鳴き通す, ああ面白いムシの声。(唱歌歌詞)
- b. 秋の夜には, 身近なところでいろんなムシたちが美しいメロディを奏でています。

ここでみられる意味拡張は「一般的な昆虫」(類) から, 「鳴く昆虫」(種) への意味のシフト, すなわち, 一般から特殊へのシネクドキーである。

2.2 基本義からの転義：〈昆虫〉から〈害虫〉へ

「ムシ」という語は, 次の例のように, 特に, 人間や農作物などに被害を与える虫を指すのに用いられる。

- (7) a. そろそろムシ達が出てくる季節なので, バルサンでも焚こうかと思っています。
- b. 沖縄の農業は台風や干ばつによる自然災害, 年中暖かいために作物に害を与える病気や

ムシが発生しやすいなどの問題があります。

ここでみられる意味拡張は「一般的な昆虫」(類)から、「害をなす昆虫」(種)への意味のシフト, すなわち, 一般から特殊へのシネクドキーである。

2.2.1 転義からの転義：〈害虫〉から〈交際相手〉へ

人間や農作物などに被害を与える虫 (=害虫) を指す「ムシ」という語は, 次の例のように, 害虫が草木や農作物をかじったり食んだりすることにより被害を与えるように, 若い娘に対し, 害をなす, 良くない男性の恋人を指すのに用いられる。

- (8) a. 年頃の娘に悪いムシが付かないように気を付ける。
 b. 娘が野球部のマネージャーになったのですが, 男子ばかりで悪いムシがつかないかと心配で友達に相談したところ「野球部なら悪いムシつかないんじゃない。逆に安心じゃないの?」と言われました。

ここでみられる意味拡張は「害をなす昆虫」から, 「女性に害をなす男性」への意味領域のシフト, すなわちメタファーである。農作物などに何かの被害を与える昆虫と, 年頃の娘に好ましくない影響を及ぼす男友達との特性の類似性に基づくメタファーであると考えられる。

2.3 基本義からの転義：〈昆虫〉から〈寄生虫〉へ

「ムシ」という語は, 次の例のように, 特に, 腹痛などの不快な症状を人間に引き起こす, 回虫などのお腹の虫 (寄生虫) を指すのに用いられる。

- (9) a. お腹のムシとは消化管の中に住み着いてしまう寄生虫のことを指します。
 b. 日本では, 昔からセンダンなどの植物やマクリ (カイニンソウ, *Digenea Simplex*) などの紅藻がムシ下しとして利用されてきた。

ここでみられる意味拡張は「一般的な昆虫」(類)から, 「お腹の中に寄生する虫」(種)への意味のシフト, すなわち, 一般から特殊へのシネクドキーである。

2.3.1 転義からの転義：〈寄生虫〉から〈不快感の原因〉へ

「ムシ」という語は, 次の例のように, かつては, さまざまな虫や寄生虫などが引き起こすと考えられていた癩癩・不機嫌・怒りなどの引き起こすもの (原因) を指すのに用いられる。

- (10) a. 普段、滅多に怒ることがない私でもムシの居所が悪い時もあります。
 b. 機嫌が悪くなりやすい赤ちゃんや、じっくり眠らずいつもグズル子供を「痢のムシがついた」と表現します。

ここでみられる意味拡張は「寄生虫」から、(人間に不快感を引き起こす)「もの」への意味領域のシフト、すなわちメタファーである。人間に何かの症状を引き起こす寄生虫と、人間に何かの不快感を引き起こす原因となるものとの機能の類似性に基づくメタファーであると考えられる。

2.3.2 転義からの転義：〈寄生虫〉から〈衝動の原因〉へ

「ムシ」という語は、次の例のように、「～(の)虫」という形で、人間の考え、感情、心理状態、などを左右する潜在意識あるいは衝動を引き起こすものを指すのに用いられる。

- (11) a. クローゼットの中はいらぬモノが沢山。いつ使うんだ? ってモノがゴロゴロ。捨てたいムシが疼きます。
 b. 桓武天皇は平安京遷都の前に長岡京遷都を行っており長岡京の発掘調査によって、歴代天皇の中でも再評価され、いま最も熱く注目を集めている天皇と思われる。俄か歴史学者のムシがうずうずとしてきた。

ここでみられる意味拡張は「寄生虫」から(人間の意識の底に潜む)「もの」への意味領域のシフト、すなわちメタファーである。人間に何かの症状を引き起こす寄生虫と、人間が何かの行動を起こす原因となるものとの機能の類似性に基づくメタファーであると考えられる。

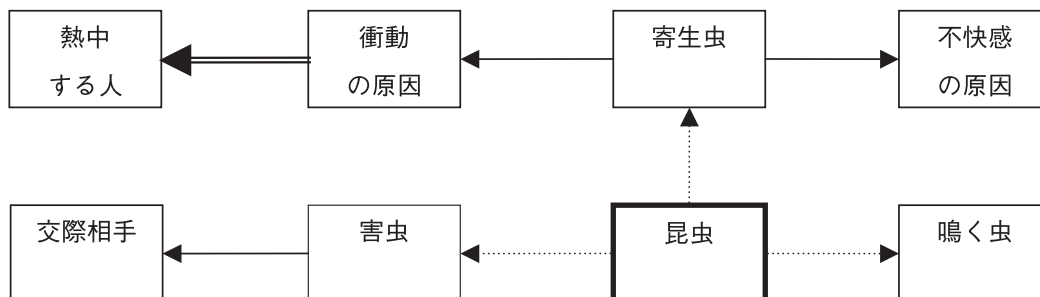
さらに、「ムシ」という語は、次の例のように、何かに熱心に取り組んだり、励んだりしている人間そのものを指すのに用いられる。

- (12) a. 豪胆な勉強のムシは稀代の「変人」南方熊楠
 b. 練習のムシ、男泣き「金」柔道男子100キロ超の石井慧

ここでみられる意味拡張は、人間に何かの行動を起こさせる原因となる「ムシ」に駆られて、その結果、「何かに熱心に励む人間」になるという、すなわち、原因によって結果を表すメトニミーである。つまり、〈衝動の原因〉から〈熱中する人〉への転義がみられる。

以上の分析から、日本語の名詞「ムシ」は多義語であり、次に示す図のように、放射状カテゴリーを構成するといえる。なお、図中で実線(→)はメタファーを、二重線(⇒)はメトニミーを、破線(…>)はシネクドキーをそれぞれ表している。

図2 日本語の名詞「ムシ」の多義構造：放射状カテゴリー



3. 英語の“bug”の意味拡張

ここでは“bug”の意味拡張についてみていくが、はじめに“bug”の複数の意味を認定する作業から始める。その手がかりとして、次のような代表的な英英辞典に挙げられている意味の記述を比較してみよう。

<i>Oxford English Dictionary</i>	<i>Merriam-Webster's Unabridged Dictionary</i>	<i>Longman Dictionary of Contemporary English</i>
<p>I. A name given vaguely to various insects, esp. of the beetle kind, also to grubs, larva of insects, etc. Now chiefly dial. and in U.S.; esp. with defining words, as field bug, harvest bug, May bug, June bug, potato bug; also fire-bug, in U.S. applied colloq. to an incendiary.</p> <p>II. spec. (a) The <i>Cimex lectularius</i>, more fully bed-bug or house-bug, a blood-sucking hemipterous insect found in bedsteads and other furni-</p>	<p>I. (a) an insect or other creeping or crawling invertebrate (as a spider or centipede) (b) any of several insects (as the bedbug or cockroach) commonly considered obnoxious (c) any of an order (Hemisphere and especially its suborder Heteroptera) of insects that have sucking mouthparts, forewings thickened at the base, and incomplete metamorphosis and are often economic pests-called also true bug</p>	<p>I. [informal] an illness that people catch very easily from each other but is not very serious</p> <p>II. [especially American English] a small insect</p> <p>III. a fault in the system of instructions that operates a computer</p> <p>IV. a small piece of electronic equipment for listening secretly to other people's conversations</p> <p>V. [informal] a sudden strong interest in doing something</p>

<p>ture, of a flattened form, and emitting an offensive smell when touched. (b) Applied to insects of the order Hemiptera or Heteroptera, to which the bed-bug belongs.</p> <p>III. In various slang uses. (a) A person obsessed by an idea; an enthusiast. Freq. with defining word, as jitterbug, litterbug; Also, an obsession, a craze. orig. U.S. (b) A defect or fault in a machine, plan, or the like. orig. U.S. (c) Schoolboys' slang for 'boy'; usu. with defining word, as day-bug. (d) A microbe or germ; also, a disease. Hence in pl., bacteriology or biology. (e) A burglar-alarm system. U.S. (f) A concealed microphone orig. U.S.</p>	<p>II. an unexpected defect, fault, flaw, or imperfection</p> <p>III. (a) a germ or microorganism especially when causing disease (b) an unspecified or nonspecific sickness usually presumed due to a bug</p> <p>IV. a sudden enthusiasm</p> <p>V. enthusiast</p> <p>VI. a prominent person</p> <p>VII. a crazy person</p> <p>VIII. a concealed listening device</p> <p>IX. [from its designation by an asterisk on race programs] a weight allowance given apprentice jockeys</p>	
--	---	--

以上3つの英英辞典に挙げられている語義の記述を参考にして，“bug”について，次のような9つの意味を認定することにする。

- ① (小さな) 昆虫
- ② 南京虫
- ③ 小型盗聴器 (隠しマイク)
- ④ 小型自動車

- ⑤ (機械や特にプログラムの) 欠陥 (故障, 不備)
- ⑥ 病原菌 (ウイルス)
- ⑦ (何かに) 熱中 (熱狂) させる原因
- ⑧ (何かに) 熱中する人 (ファン, マニア, 狂信者, 熱愛者)
- ⑨ 目立つ人 (重要人物, 偉ぶる人) ⁴⁾

3.0 基本義: <昆虫>

英語の“bug”の基本義についても、日本語の「ムシ」の基本義を仮定した条件を適用すればよいと思われる。次のような例における“bug”はそれらの条件を満たしているといえる。

- (12) a. A bug is crawling on the tree branch.
(木の枝を虫がはっている)
- b. The bugs were crawling all over our picnic lunch.
(ピクニックの弁当に虫がいっぱいいたっていた)

したがって、“bug”の基本義としては、(さまざまな小型の) <昆虫>を認定しておくのが妥当であろう。

3.1 基本義からの転義: <昆虫>から<南京虫>へ

“bug”という語は、次の例のように、ベッドのマットレスやカーベットのの下などに住みつき、人間に害を与える寄生虫を指すのに用いられる。

- (14) a. (Bed) bugs bite and suck blood from humans.
(南京虫はヒトに噛みついて血を吸う)
- b. (Bed) bugs are small, elusive, and parasitic insects of the family Cimicidae.
(南京虫はトコジラミ科の小型の見つけにくい寄生虫だ)

ここでみられる意味拡張は「一般的な昆虫」(類) から、「人間に噛みつく寄生虫」(種) への意味のシフト、すなわち、一般から特殊へのシネクドキーである。

3.1.1 転義からの転義: <南京虫>から<病原菌>へ

“bug”という語は、次の例のように、人間の体内に侵入し、人間に病気を引き起こすバイ菌やウイルスを指すのに用いられる。

- (15) a. He was laid up for a week by an intestinal bug.
 (彼は腸炎で一週間寝込んだ)
 b. I'm not feeling well; I must have picked up a bug somewhere.
 (気分がすぐれない；どこかでバイ菌をもらったにちがいない)

ここでみられる意味拡張は「南京虫（寄生虫）」から「病原菌」への意味領域のシフト，すなわちメタファーである。寄生虫の人間に被害を及ぼすという特性と，病原菌が人間の体内に入り込み発病させるという機能との類似性に基づくメタファーであると考えられる。

3.1.2 転義からの転義：〈病原菌〉から〈熱中させる原因〉へ

“bug”という語は，次の例のように，“be bitten by~bug”（～の虫にかみつかれる）の形で，人間に何かの行動や行為を熱心に行わせる何かを指すのに用いられる⁵⁾。

- (16) a. Ted has been bitten by the skateboarding bug.
 (テッドはこのところスケボー熱に浮かされている)
 b. The author was 30 years old before he was bitten by the writing bug.
 (著者は30歳になって初めて書くことにとりつかれた)

ここでみられる意味拡張は「病原菌」から（何かの行動の）「衝動となるもの」への意味領域のシフト，すなわちメタファーである。人間に病気を発症させる病原菌と，人間の何かに対する熱中を生じさせるものとの機能の類似性に基づくメタファーであると考えられる。

3.1.3 転義からの転義：〈熱中させる原因〉から〈熱中する人〉へ

“bug”という語は，次の例のように，“~bug”（～の虫）の形で，何か特定の趣味や行動に熱心に取り組むその人間自体を指すのに用いられる。

- (17) a. Marie is a hopeless movie bug. Any kind of movie is fine with her.
 (マリーは救いようのない映画狂だ。彼女ときたら，映画なら何でもいいんだ)
 b. Bob is quite a camera bug, but the pictures he takes are not very good.
 (ボブは大変なカメラ狂だけど，撮った写真はあんまりうまくない)

ここでみられる意味拡張は，人間に何かの行動を起こさせる原因となる“bug”に駆られて，その結果，「何かに熱心に取り組む人間」になるという，すなわち，原因によって結果を表すメトニミーである。つまり，〈熱中させる原因〉から〈熱中する人〉への転義がみられる。

3.2 基本義からの転義：〈昆虫〉から〈小型盗聴器〉へ

“bug”という語は、次の例のように、盗聴などに使われる小型の隠しマイク（盗聴器）を指すのに用いられる。

- (18) a. The police searched the courtroom for bugs.

(警察は法廷に盗聴器がないか捜査した)

- b. The FA launched an investigation into how a bug was planted in a meeting room at the team hotel in Hertfordshire.

(フットボール協会はハートフォードシャーにあるチームの宿泊ホテルの会議室にどのように盗聴器が仕掛けられたのか調査に乗り出した)

ここでみられる意味拡張は「昆虫」から「盗聴器」への意味領域のシフト、すなわちメタファーである。盗聴器の、小型で、どこかに隠して使われるという特性と、昆虫の、小型で、どこかに潜んでいるという特性との類似性に基づくメタファーであると考えられる。

3.3 基本義からの転義：〈昆虫〉から〈小型自動車〉へ

“bug”という語は、次の例のように、外見が昆虫（特に、甲虫類）に類似した自動車を指すのに用いられる。

- (19) a. Volkswagen's big Bug

(フォルクスワーゲンの大型バグ)

- b. My first car was a Bug. It was a deathtrap, but I loved it!

(初めて乗った車はバグでした。危なかったけど大好きでした！)

ここでみられる意味拡張は「昆虫」から「自動車」への意味領域のシフト、すなわちメタファーである。昆虫の、特に甲虫類の姿と、甲虫を思わせる自動車のデザインとの形態の類似性に基づくメタファーであると考えられる。

3.4 基本義からの転義：〈昆虫〉から〈欠陥〉へ

“bug”という語は、次の例のように、機械の不備やコンピュータのプログラムの誤りを指すのに用いられる。

- (20) a. The test flight discovered the bugs in the new plane.

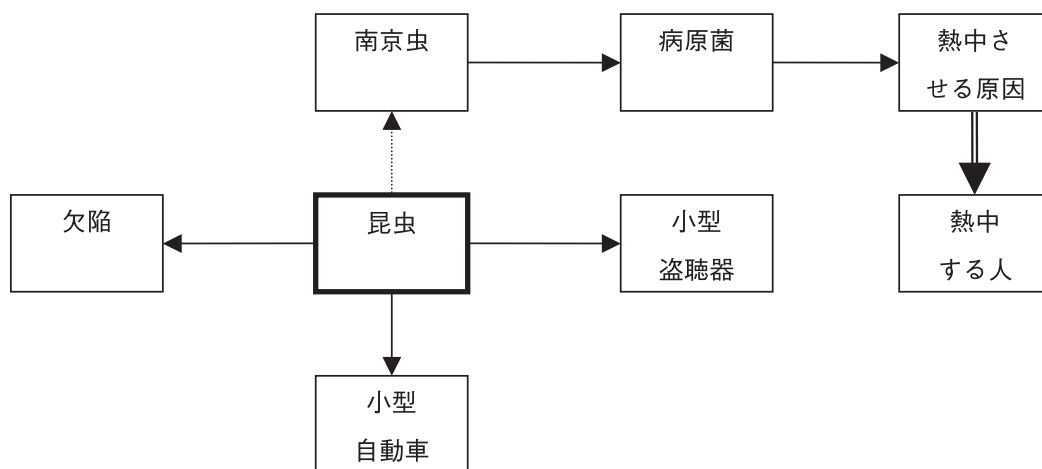
(試験飛行で新機種の欠陥が発見された)

b.He said they had eliminated all the bugs in the software, and we hoped this was true.
 (彼はソフトのバグを全部除去したと言ったが、今度は本当であることを願う)

ここでみられる意味拡張は「昆虫」から（機械，システム，プログラムの）「欠陥」への意味領域のシフト，すなわちメタファーである。機械類やプログラムの欠陥や不備は，昆虫のように追い払いたい（迷惑な）もの，という両者の類似性に基づくメタファーであると考えられる⁶。

以上の分析から，次に示す図のように，英語の名詞“bug”は多義語であり，放射状カテゴリーを構成するといえる。なお，図中で実線（→）はメタファーを，二重線（⇒）はメトニミーを，破線（…>）はシネクドキーをそれぞれ表している。

図3 英語の名詞“bug”の多義構造：放射状カテゴリー



4. おわりに

本論では，日本語の名詞「ムシ」と英語の名詞“bug”について，その多義構造を認知意味論的観点から分析した。その結果，次のことが明らかになった：

- (21) a. 「ムシ」と“bug”は，それぞれ多義語であり，放射状カテゴリーを構成する。
- b. 基本義については，日英語ともに，<昆虫>を認定することができる。
- c. 転義については，日英語ともに，<熱中する人>を認定することができる点が興味深い。一方，日本語の<寄生虫>と英語の<病原菌>のように，メタファーによるものでありながら，意味拡張の方向が微妙に異なるものもある。

d. 日本語にしかみられない転義として<交際相手>が、英語にしかみられない転義として<小型盗聴器>などがある。

【注】

- 1 多義語の認知意味論的分析の手法については初山 (2002), 初山・深田 (2003) を参照。
- 2 全体を表す形式を用いて部分を、逆に、部分を表す形式を用いて全体を表す比喩もかつてはシネクドキー (提喩) に含めることが多かったが、現在では、メトニミー (換喩) として扱うのが一般的になってきている。
- 3 ある性質や性向や性癖をもった人間のことを、侮蔑や非難を込めて、「弱ムシ」「泣きムシ」「点取りムシ」などと呼ぶことがある。これらの表現における「ムシ」は接尾辞的に用いられているが、この接尾辞的「〜ムシ」はいかなる要素にも付き得るわけではない、すなわち、高い生産性をもつ接尾辞ではないので、本論の分析の対象からは除外した。
- 4 *The Historical Dictionary of American Slang*によれば、“big bug”は1817年に最初の記載があり、19世紀の英語 (特に、米語) で普通に使用された「重要人物；特権階級」という意味の俗語である。また、*OED*によれば、1771年以来、“bug”には「重要人物」の意味があった。したがって、意味拡張の動機付けとしては、明らかにメタファーに該当するが、<昆虫>と<重要人物>との間のいかなる類似性に基づくメタファーなのか同定することは困難であるので、この意味については除外する。
- 5 英語の“bug”にも、日本語の「ムシ」のように、体内にいて人間に何かの行為を起こさせる原因となるもの、という意味がある。例えば、The way Claudia’s been picking on her dog today, you’d think she had a bug up her ass. (今日のクラウディアの犬のいびりかたからして、彼女はお尻に虫がいるようだ) という文は、日本語の「ムシの居所が悪い」という慣用表現に通じるものがある。
- 6 プログラムの誤りを“bug”と呼ぶようになったのは、初期のコンピュータの論理スイッチに使われていた電導式リレーの間に小さな虫が挟まり、その場所が接続不良を起こして動作に不具合を生じたことが語源といわれる。世界最初の“bug”は1947年に米ハーバード大学で海軍研究所に出荷される前のテストを受けているコンピュータから発見された蛾だという (IT 用語辞典 e-Words: <http://e-words.jp/>)。同様の記述が瀬戸 (2007:139) にもある。

【参考文献】

- Labov, William (1973) “The boundaries of words and their meanings.” In: C.J.N. Bailey and R.W. Shuy (eds.) *New ways of analyzing variation in English*. Washington: Georgetown University Press. 340-73.
- Lakoff, George (1987) *Women, fire, and dangerous things: what categories reveal about the mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 初山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』(シリーズ・日本語のしくみを探る⑤) 東京：研究社。
- 初山洋介・深田智 (2003) 「意味の拡張」松本曜 (編) 『認知意味論』(シリーズ認知言語学入門第3巻) 東京：大修館書店, 73-134.
- ・——— (2003) 「多義性」松本曜 (編) 『認知意味論』(シリーズ認知言語学入門第3巻) 東京：大修館書店, 135-186.
- Rosch, Eleanor (1975) “Cognitive representations of semantic categories.” *Journal of Experimental Psychology: General* 104: 192-233.
- 佐藤信夫 (1992) 『レトリック感覚』講談社学術文庫。
- 瀬戸賢一 (1997) 「第II部 意味のレトリック」巻下吉夫・瀬戸賢一 『文化発想とレトリック』94-177. 東京：研究社。

- 瀬戸賢一（編）（2007）『英語多義ネットワーク辞典』東京：小学館。
- Sweetser, Eve (1990) *From etymology to pragmatics: metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Taylor, John Robert (1995) *Linguistic categorization: prototypes in linguistic theory* (2nd ed.) . Oxford: Clarendon Press.
- 辻幸夫（2002）『認知言語学 キーワード辞典』東京：研究社。
- Wittgenstein, Ludwig (1978) *Philosophical investigations* (trans. G.E.M. Anscombe) . Oxford: Basil Blackwell.